

発行：熊谷市立江南文化財センター

TOPICS

熊谷市宮下遺跡の発掘調査

宮下遺跡の発掘調査は平成 28 年 2 月より実施しています。遺跡は江南台地上に立地し、遺跡の北側には荒川右岸の肥沃な低地が広がっています。調査面積は約 24,000㎡で、遺構は調査区全面で検出されました。現在のところ、竪穴建物跡が約 70 棟、掘立柱建物跡 2 棟、溝跡約 60 条、井戸跡 2 基のほか土坑・ピットなどが確認されています。また、調査区の東西に埋没谷が確認され、東の谷の底からは縄文時代後期後半（約 3,400 年前）の土器と溝跡がみつかりました。

調査では奈良・平安時代の遺構・遺物が多く確認されていますが、特徴としては小鍛冶関連の痕跡がみられることです。工房とみられる遺構からは、鉄滓と高温によって床面が強く焼きしまった炉、フィゴの羽口などがみつかり、さらに、鎌や刀子、鉄釘など鍛冶で作られた道具が出土しています。これらの道具は、荒川流域に含まれる砂鉄が原料と思われるが、採取地は不明です。さらに鍛冶工房跡と燃料となる炭をつくるための炭窯が確認されていることから、この集落で小鍛冶が行われたといえます。古代の当地は武蔵国男衾（おぶすま）郡に属します。遺跡の近くには古代寺院である寺内廃寺や、延喜式内社の論社とされる出雲乃伊波比（いずものいわい）神社が所在するなど当時の重要な地域であったことがうかがえます。今回の発掘調査で小鍛冶関連の遺構・遺物が確認されたことは、男衾郡の開発状況を知るうえで貴重な手がかりになりました。なお、平成 28 年 8 月 6 日（土）に遺跡見学会を実施いたしますので、お立ち寄りいただければ幸いです。（蔵持） （写真：上：宮下遺跡全景 下：出土したカマドの煙道土器管）

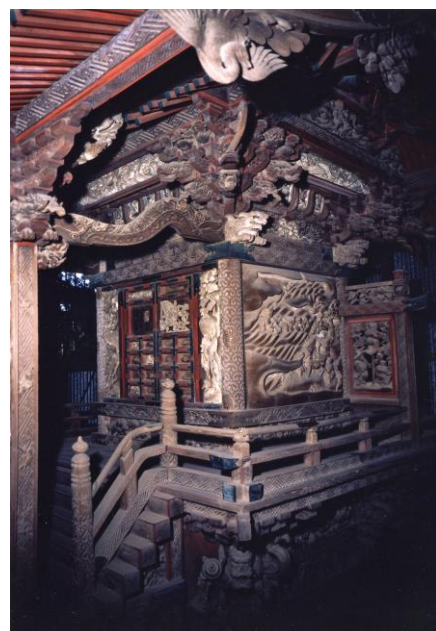


県指定文化財「諏訪神社本殿」

平成 28 年 3 月 15 日、熊谷市上新田に所在する「諏訪神社本殿」が埼玉県の有形文化財（建造物）に指定されました。

「諏訪神社本殿」は、当地の柴田信右衛門豊忠によって延享（えんきょう）3 年（1746）に創建されたと伝えられ、その後、嘉永 5 年（1852）に補修されています。妻沼聖天山本殿の国宝「歓喜院聖天堂」の造営に深く関わった三ヶ尻村（現在の熊谷市三ヶ尻）の内田清八郎と、玉井村（現在の熊谷市玉井）の今村勘八郎ら近隣出身の名工が中心的な役割を果たしました。聖天堂の華麗な彫刻を統括した石原吟八郎と、聖天堂の奥殿彫刻知られる小沢五右衛門らが高い技術を発揮しました。同時期には聖天堂の建立も進められていましたが、水害などの影響で中断。工事の再開を待つ名工たちが諏訪神社に集い、本殿の建築に取り組んだことが分かっています。本殿は正面幅が約 1・5 ㍓、奥行が約 2・3 ㍓の規模で一間社流造の構造です。檜皮葺（ひわだぶき）の屋根が特徴で、各所には数多くの装飾彫刻が施されています。

江戸時代中期における熊谷地域の社寺建築の歴史を知る上でも貴重な文化財と評価され、群馬から埼玉に及ぶ秀逸な彫物師集団の存在を今に伝えています。（山下）



市内遺跡発掘情報

瀬戸山古墳群第 29 号墳の発掘調査について

平成 28 年 3 月、市内楊井において瀬戸山古墳群第 29 号墳の発掘調査を行いました。今回の調査は、個人による農地改良に伴う事前調査として地表面に一部露出していた横穴式石室を中心に実施しました。石室の西側は既に壊されていましたが、玄室と呼ぶ遺体を安置する部屋は、ノミで四角く加工された大きな凝灰岩を馬蹄形状に二段組み合わせさせて造られていました（右写真）。そして底面には礫が敷き詰められており、副葬品として鉄製の鍬（やじり）が数本出土しました。石室の規模は、全長約 5 m、玄室の長さは約 3 m を測ります。また石室の外側では、異なる色の土や粘土を積み重ねる“版築（ばんちく）”と呼ばれる工法で墳丘が構築されていたことも確認されました。築造年代については、石室の構造や出土した鉄鍬の形状、埴輪がないことなどから 7 世紀代と考えられます。（松田）



諏訪木遺跡発掘調査 ―古代道路の発見か―

平成 28 年 4 月から、市内上之地内に所在する諏訪木遺跡において、道路新設に伴う記録保存のための発掘調査を実施しています。現在までの 1, 200 m²（全体の 15% ほど）発掘調査において、大きな溝跡が 3 条、土坑が 3 基、柱などの掘りこみが数十基確認されています。注目すべきは、大きな遺構のうち 2 条が南北に平行に走り、また土層断面から古代の道路跡の可能性が考えられています。

宝亀二年（771）、武蔵国が東山道から東海道に所属替えになりますが、それ以前は、東山道から武蔵国府に至るおよそ 12 m の官道は「東山道武蔵路（みち）」（右図：東山道武蔵路についての推定図・矢印）と呼ばれ、概ね武蔵国府から直線的に北上するルートが有力視され、建設の目的は都と国府や郡家（ぐうけ）を結ぶためのものと考えられています。

今回の道路跡と考えられるものは、最大幅 12 m で、これまで県南での発見事例はありますが、県北においては未検出であったため、これが東山道武蔵路と確定できれば、貴重な発見となります。しかし、出土遺物量が少ないことから、確証が得られず、今後改めて検証していく必要があります。（腰塚）



連載 くまがやの古墳群

⑫万吉下原古墳群―方形周溝墓群を端緒とする古墳群―

万吉下原古墳群は、万吉地区の和田吉野川を眼下に臨む江南台地北縁部に所在する古墳時代前期及び古墳時代後期に造られた古墳群です。現在 8 基の存在が確認されていますが、そのほとんどが今に墳丘を残していません。古墳時代前期の方形周溝墓群は台地縁辺部に確認されていますが、台地下に広がる低地における水田開発という小規模な生産基盤をもっていた人々の墓と推定されます。方形周溝墓とは、周囲に方形の溝を巡らした墓で、一辺が 9～13 m の規模のものが 3 基確認されていて、4 世紀後半から末にかけて築造されたと考えられます。

一方、古墳時代後期の古墳は 5 基確認されていますが、方形周溝墓群に近接する 1 基を除いて、やや離れた台地縁辺部及び台地中ほどに立地します。墳丘の規模は、おおむね直径 20 m 前後です。埋葬施設が確認された古墳は 3 基ですが、いずれも横穴式石室で、うち 2 基は凝灰岩の切石で構築され、残る 1 基は河原石乱石積の胸張型横穴式石室です。これらの石室からは、耳環、絞具（ベルトのバックル）、刀子、鉄鍬、直刀などが出土していて、周溝から円筒埴輪が出土した古墳もあります。古墳の築造時期は、6 世紀末から 7 世紀前半代までと考えられます。（吉野）

写真：万吉下原古墳群第 5 号墳（中央に横穴式石室が見える、1991『万吉下原遺跡』報告書から転載）



文化財センター通信

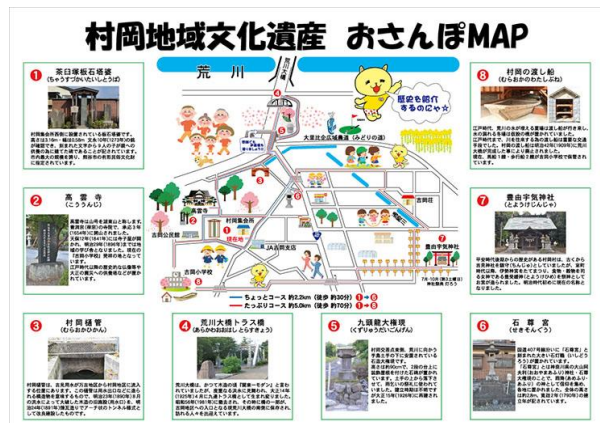
◇愛染堂保存修理事業について

平成 27 年度から実施していた愛染堂保存修理事業は概ね終了しました。本工事は約 2,100 万円（屋根廻り、柱改修）、高欄など追加部分の工事が約 250 万円、台座修理などの費用約 50 万円を要しました。その他を含む総事業費は約 2,460 万円で、熊谷市補助金が 500 万円、寺及び檀家ほか所有者負担が約 400 万円、残りの額は寄付及び募金で賄われました。今後、内部の畳替え板張りなどを実施しますが、愛染明王の移動などを経て、最終的な竣工を迎える予定です。なお、9 月 18 日に同院にて落慶式を開催します。（山下）



◇村岡地域における文化遺産事業

平成 27 年度、熊谷市民協働事業「熊谷の力」事業において、村岡自治会と江南文化財センターの協働事業として、地域の文化財の保護、調査、啓発、情報発信を進めてきました。その成果として、村岡地域内の歴史遺産などを周遊するコースを作成し、ウォーキングマップ説明板である「おさんぽ MAP」（右写真）を設置しました。その他、リーフレットを作成配布し、PR を実施しました。平成 28 年 7 月 24 日にはそのマップを利用したスタンプラリーを实践し、約 200 名の参加がありました。（山下）



◇調査報告書の刊行について

平成 27 年度に刊行した埋蔵文化財調査報告書は、以下の 4 冊です。これらの報告書は、江南文化財センターや市立図書館などで閲覧できます。またホームページ「熊谷デジタルミュージアム」でも無料公開（PDF 版）していますので、興味のある方はぜひご覧ください。（松田）

報告書名	所在地	時代
『池ノ上（いけのうえ）遺跡Ⅰ』	妻沼	奈良・平安、鎌倉時代
『樋の上（ひのうえ）遺跡Ⅱ』	三ヶ尻	奈良・平安時代
『桜山（さくらやま）遺跡Ⅲ』	板井	縄文、奈良・平安時代
『西別府祭祀（にしべっふさいし）遺跡Ⅳ』	西別府	弥生～江戸時代

文化財探訪 芭蕉句碑：妻沼聖天山歎喜院

妻沼の聖天山境内（鐘楼西側）に「稲妻や 闇のかた行 五位の声」と刻まれた芭蕉句碑があります。芭蕉が、元禄 7 年（1694）猿雖亭（えんすいてい）で詠んだものと推定されている句です。五位とは五位鶯（ごいさぎ）のことで、夕方になると不気味な声を出して飛び特性がある鳥です。この句碑は、文化 9 年（1812）7 月、地元の歌人五翁・角浪・可良久・五渡・五楼により建立されたものです。五翁は妻沼の人で、加舎白雄門・建部巢兆に学び、60 歳の時に息子に俳号（五渡）を譲りました。五渡は五翁の子理兵衛。五桜は、弥藤吾村の人で、修験藤原山宝蔵院の二十三世。可良久は善ヶ島村の歌人羽鳥又左衛門。

碑裏面には、建部巢兆による撰文が刻まれています。建部巢兆は、加舎白雄の門人で、白雄八弟の一人。小林一茶と交友があり、妻沼を訪れた際に「五月雨や まくら借たる 桑の奥」との句を詠んでいます。書は、太田蜀山人。狂歌師で、江戸牛込生まれ。湯島聖堂の学問吟味に合格し、各地を赴任し、紀行文・句集を刊行しています。このように本句碑は、地元妻沼と江戸の俳人・歌人・狂歌師のコラボにより建立されたもので、近世文化人の交流を物語る碑として貴重なものです。（森田）



文化財コラム 古代との遭遇・第18話『幡羅遺跡・古代の饗宴』

熊谷市と深谷市の境に古代の幡羅郡の役所跡と考えられている遺跡があります。深谷市の幡羅遺跡と熊谷市の西別府遺跡です。この役所跡は、現在の深谷市と熊谷市にまたがっていて、7世紀末から11世紀前半ころまで営まれたと考えられています。

今回、特に注目するのは、幡羅遺跡の中で行政実務が行われたと考えられている場所の出土品です。その場所からは、館(たち)(国司などが地方に来た時、宿泊したとされる施設)と考えられる建物跡が発見されています。その館の北側の大きな穴から多量の土器や焼土、炭化物のほか、シカ・イノシシなどの獣骨、カモなどの鳥骨、タイ・カツオ・サバ・フナ・アユなどの魚骨、ハマグリ・アカニシなどの貝殻が出土しました。これらの出土品から、国司などを歓待するために館で饗宴が行われたと推測されます。(上写真：廃棄土坑)



今から1000年～1300年前、本遺跡は関東平野の奥部に位置するにも関わらず、海産の貝類と魚類が多く発見され、貝類は貝殻が出土していることから、生のままで運ばれた可能性が高いと考えられています。これらの運搬には、利根川が利用されたものと推測されますが、東京湾までは約60kmあることを思うと非常に驚嘆に値するものと考えます。これらの、海産物は日常的な食事ではなく、特別な場で供されたものと、饗宴に供されたものと思われます。(金子)



シカ・イノシシ・ハマグリ



タイ・カツオ・サバ・サケ・フナなどの魚骨



キジ・カモ・ウズラなどの鳥骨

編集後記

熊谷市は多くの市民団体や NPO などと協力しながら様々な施策を進めています。文化財保護の分野においても史跡や地域の文化遺産を保存管理する団体や、無形民俗文化財など伝統芸能を継承する団体などと協働し、文化財の保護に努めています。近年、地域の文化財を多くの人に知ってもらうための試みが全国各地で積極的に進められています。文化財や地域の歴史を再認識することによって、郷土への愛着が育まれ、地域のコミュニティの活性化につながる事例も増えています。

ラグビーワールドカップ 2019 の開催地となる熊谷市においても、本市の歴史を彩る文化財や文化遺産を世界に向けて発信していくことが求められています。「一つの文化財との出会いが、それからの人生に夢や希望を与える」。そんな可能性を信じながら、多様な文化財の情報発信に取り組んでいきたいと考えています。(山下)



発行：平成28年8月1日

熊谷市立江南文化財センター（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係）

〒360-0107 熊谷市千代329番地

電話 048-536-5062 FAX 048-536-4575

メール c-bunkazai@city.kumagaya.lg.jp

HP:「熊谷デジタルミュージアム」<http://www.kumagaya-bunkazai.jp/museum/index.htm>

文化財の紹介、ブログ「熊谷市文化財日記」、「BUNKAZAI 情報」バックナンバーなどを豊富に掲載